

おうちの
みんな
読んでね



連続テレビ小説「虎に翼」第四十話から

トラちゃんができ
るのは：
トラちゃんの好き
に生きることです。



出征直前夫婦二人の場面。結婚した経緯について詫げる主人公寅子（ともこ）に応え、夫の優三は語りかける。

また弁護士をしてもいい、違う仕事を始めてもいい、ゆみのいいお母さんでいてもいい。

僕の大好きな、あの一、何かに無我夢中になっている時のトラちゃんの顔をして、何かを頑張ってくれること。

寅子は戦争で、せっかく得た弁護士の職を失くしているが、夫は後に残す家族や家のことを頼むなどとは全く言わない。しかも、頑張れ.. と言いかけ、

いや、やっぱり頑張ってくれなくていい。トラちゃんが後悔せず、心から、人生をやり切ってくれること。それが僕の望みです。

なんという深いセリフだろうか。ここには相手に対する縛りも要求もなく、存在まるごとの肯定しかない。

この放映は妻が世を去って一ヶ月の頃。自分の彼女への思い、たぶん彼女の自分への思いも同じく、まさにそうなんだよ！その通りだ！と強く共感した。

もし自分が死に臨んだとしたら、伴侶や大事な人に何を望み、何を伝えたいだ

(次頁へ)

貴方の感じられてる

と虚しくこそ

眞実の世界への

強烈な憧れなのです

◆福井市生まれの米沢英雄氏は開業医の傍、多数の著作や講演活動を通じて、浄土眞宗の実践・伝道に多大な功績を残されました。

ある青年が、一流企業に就職して三年経ち、日常が空虚に感じてしまうことを米沢氏に訴えます。年齢問わず、毎日同じことを繰り返す、生きる意味を見出せない辛さは誰しもが抱える苦悩です。

米沢氏はその悩みの原因を「人生一貫して命懸けになれるものがない」と指摘します。親鸞聖人の気迫を窺う恩徳讃「如来大悲の恩徳は 身を粉にしても報ずべし 師主知識の恩徳も ほねをくだきても謝すべし」をもとに、比叡山時代の聖人と青年の苦悩を重ね合わせ、空虚感はそのまま虚しくない人生を求める姿であり、生きることを放棄してない証とみえます。

『如来大悲の恩徳は』ここに深い感動が脈をうつつるでしょう。いのちをかけた美しさがあるではありませんか」と味わい、その気迫と感動に満ちた時間を送ることが「憧れの世界」であり、本当に命を大事する姿なのだと示されます。

それが難しいのは、煩惱によって自ら苦を生み、生死に向き合うことを妨げているからです。しかしその苦しみこそが、眞実を求めて動く姿なのです。(参照「月々の言葉」)

(前頁より)

ろう。自分がやり残したこと？あるいは世間的立場、価値観を踏まえた立派な生き方？勿論大事なことだが、下手したらエゴの押し付けにもなりかねない。究極、自分自身が主体で好きに生き切るという、普遍的なテーマが浮かんでくる。

誰もが、時代や家庭環境や身体面など制約の中で生活している。時間には限りがあり、明確な志があっても時に迷いへこたれ自分を見失う。後悔も思い残しも抱えてなお、与えられた命を生き切ったと言えるかどうか…。私事ながら妻の覚悟・生き様を振り返らざるをえない。

同時に、どんな選択をしようとも一切裁かれない、頑張ることすら問わない、というのは世俗的モノサシを離れた、仏側からの視点のようにも思える。

仏説無量寿経の物語で、法蔵菩薩は一切衆生をどんな存在として救い、そのためにどんな世界を建立するか48通りに表した。その完成のために、衆生側には一切の課題を求めず全て自らに途方もない修行を課し、その結果阿弥陀という仏となり、願いは力となって現に働いてる…。

ちなみにその世界(極楽浄土)には、地獄餓鬼畜生道はなく、皆が金色に輝き美醜の差はなく、互いの心が通い合う。

「虎に翼」でも実に様々な立場や生き方が丁寧に描かれ、そのどれもが肯定され、背景には日本国憲法第14条が掲げられた。全て人生が差別なく尊く保証される社会が人間として理想だからこそ、日本国憲法も阿弥陀仏のご本願も、私たちの心に長く響いてきたのではないか。

坊守・芳蓮院釈慈穂 往生について その2

妻、林千種は令和6年4月28日夜、49歳の生涯を全うしました。夏号に引き続き、ここに至る経緯と半年近くを経た筆者の思いを記します。(住職 林 暁)

●二年三ヶ月、妻はあくまで自らの治癒力で完治するのが本物だというまっすぐな信念と持ち前の集中力で熱心に勉強し、自らの生き死に正面から向き合い続けました。

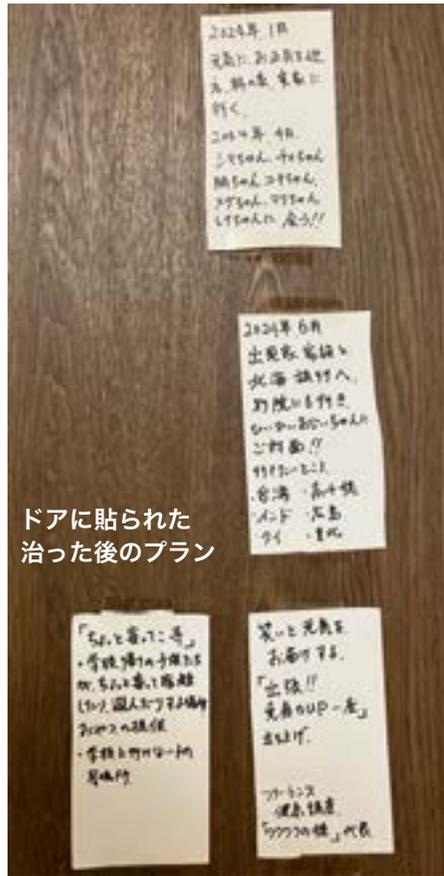
NPO がん患者学研究所のカウンセリングや自助退縮者の報告を手掛かりにして、毎日毎瞬が自分自身との格闘。がんを敵対視するのではなく、この病気を作ったのも自分、治すのも自分だと。

家事や夫婦や仕事を真面目にこなし、よい人間であろうと抱え込んできた心身のストレス、深層に抑圧された思いを深掘りし、単に病気を治すことよりも生き方や意識をどう改めていくか。

人生で本当にやりたいことを見つめ直し、殻を破ることを必死に取り組み、恐怖ではなく愛と喜びを自分に満たし、生かしてきている全てに感謝を向ける…。

彼女は元々自らを強く主張し正当化するとか、大勢の中で目立つという人ではなく、明るく誠実で、人を楽しませることが好き。嫌味とか妬むとか恩着せがましいところはひとつもなく、他人を悪く言ったり、人から悪く言われたりも聞いたことがない、自分が出会った中でも実に稀有な女性です。

大学時代の友人ら何組も遠方からお悔や



ドアに貼られた
治った後のプラン

みに来られたとき、「彼女が入ると場が盛り上がり、いつも笑い転がっていた」などと語ってくれました。

他者への配慮・気遣いはことに丁寧で、友達や親兄弟には勿論、保健の外交員さんも「私らのような者にも、来訪した時ちょっとしたお菓子を用意してくれた」など。

長女で介護職だった為か責任感が強く、家を出たことも治療生活面でも、自分が選んだことだからと何事にも言い訳せず、自ら定めた段取りを一途に実践してきました。

日記をつけて心身の観察とモチベーション維持に取り組み、(がんのエサになる)糖類・小麦粉・卵・肉・魚は一切食わず、体のあらゆる部位に感謝の言葉を唱え、今冬には折り紙にびっしり「ありがとう」「大丈夫」と書き込んで沢山の鶴を折り、病室で食事が入りにくくなくても「一皿ずつ必ず一口は食べるようにしてる」などなど。

●また、痛み辛さに我慢強く、自分にも不具合や愚痴をあまり訴えず、メールや電話では周囲にも元気そうに映ったようです。

美味しいものを食べたり旅行に行けない代わりに、そういった動画をスマホで見たり楽しんではいましたが、時折弱音を吐いて

「これから体がすっきりすることってあるのかな」「辛い辛いって思うから辛い現象が起きるんだよね」「(大事な人に) まだ何も恩返しできてない」などと口にし、自分は励ましの言葉も言いあぐねてました。

夜には「もう帰る時間だよ」などと寂しさをたまに見せながらも、自分を案じて「もう帰り際が長いんだから」と急かされたりしました。

今更ながら、そんな言葉を真に受けず喧嘩してでももっと思いを聞いてあげられたのではとか、夜一人を極端に怖がる母をおいてでも、もっと一緒に寝泊まりして彼女を安心させられたのではないかと、どれだけ悔やんでも悔やみきれません。

●夫である自分はこの三年余りの期間、親と寺と妻(車で15分位)との間に入って一種の非常事態でした。がん発覚後の年は父の後始末にも忙殺され、頭も体も二人か三人欲しいほど。特に昨秋繁忙期が過ぎた12月以降は、体力低下した彼女の買い出しや身の回りの世話、お灸や温湿布の補助、手当てなどに毎日彼女のもとに通い、文字通り一分も惜しい生活が続きました。

ついオタオタする自分に彼女は「ここではもっとゆっくり楽しくして。私の免疫力が落ちちゃうから」とか、帰り際に「暁さん、ご陽気さんでいてね」などと言われたり。

本人の調子が悪そうで不安を感じても口には出さず、「まだ食欲はある」「立ってトイレにも行ける」「今日は久々に便もスルッと出た」などと言う彼女の前向きさをただ



ただ一緒に喜び応援するよう努めました。

しかし彼女の焦りと真剣さから見たら、自分の生き方や関わり方はおよび腰で中途半端、先回りした対応をとれず後手後手になりがちだったと思います。

「あなたの講釈でなく私の希望をまず聞いて」「思いでなく実践!」「また言い訳!」

など何度もダメ押しされたり、病気以前にはあまり感じなかった彼女の強い緊張が頻出し、寺の古い因習や難しい親も重荷で、夫婦の危機も何度かありました。

昨夏、自分がたまたま知ったコーチングの本をきっかけに、互いのビジョンや性分、価値観、人生の目的などについてより深く、今まで話さなかった幼少期の話など幾度も交わしました。秋以降、自分の構え方もやっと追いついたのか、「離れていても繋がってるのわかるから」言ってくれました。

信頼が深まったと言われて嬉しかったものの、逆にそれは彼女の気力体力減退の裏返しだったのかもしれない。集中力やゆとりの低下を感じ始めました。

体力低下の中、これまで何度も絶妙なご縁に巡り合い、助けていただいた流れを信じて、小さなことにも感謝を向け、家に居場所を見つければ奇跡は起こりうると、最後まで二人で起死回生を待ち望んでいました。愚かに見えるかもしれませんが。

ただ、傍にいる人間にとって、本人であればなおさら、どこかに微かな希望を見つけ、何かにでもすがりたいというのは自然な感情、本能的な祈りなのかと思います。

●最愛の人の命に一人向き合う、ということは頭の中も実生活にも余裕がなくなります。知人友人のヘルプがあるとはいえ、家事も仕事もできることは全て後回しで必要最低限。世間の活動や楽しみや以前の関心ごとはおろか、1秒でも多くこの命のために頭を使うことが最優先になりました。



日常、私たちはあれこれ主義主張を張り、多くを得ようと頭を忙しくし、日々の楽しみを求めている、それら大事なことです。目の前の生き死からみれば実に些末なこと。極端に言えば、日常私たちは生死の境に目を背け、限りある人生を大いなる時間つぶしに使っているのかとさえ思えてきます。

妻を見送ったあと、何故こんなに涙になるのか気づきました。自分にとって彼女は、ようやく出逢えた愛そのものだったと。

帰り際、もう立ち上がる体力がなくなってソファにもたれる妻に思わず「愛してるよ！」と口走ると、「私も！」と返ってきました。結婚も遅く、子供もいない状況でなおさら、二人でいることでささやかながら夢も希望も笑いもありました。葛藤の末「人が集まるお寺にしよう」と語ってくれ、暮らしを支え合い分かち合うはずだった人。

それら全てを失い、呆然と打ちのめされ、独り後始末にかけずり回っていたある日ふと、自分がこの世を去る時「よくがんばったねー！えらかったよー」などと彼女がお浄土から必ず笑顔で迎えてくれる、ただそれだけが希望だという思いが、大粒の涙とともにあふれ出たこともありました。

●8月頭、帰省した妹らとお墓に納骨し、百箇日法要を勤め、本盆には墓参り。それぞれ一人読経しながらも涙込み上げ、ひとつひとつの仏事を夫である自分が住職として執行することが、いったいこんなにも辛いものかと思ひ知らされました。人に話すことも続き、悲しみぶり返します。

その頃、友人が勧めてくれた精神科医エリザベス・キューブラー・ロスの名著「永遠の別れ」には、喪失や死別に際した心模様（否認・怒り・取引・抑うつ・受容）が丁寧に描かれ、自分に湧き上がる感情が言語化されたようで、読み進めながらいちいち納得。癒されました。

まさしく、最後の息まで見届けたはずなのに心が拒否している。これだけ泣いたのに、もう何週間も経ったのに、どこに行っても彼女がいない..。

自分として精一杯だったとは思いつつ、もっと他にできたことがあったのではないか、なぜ肝要なところで彼女の切なる願いに応えられなかったのか、そもそも彼女のこの状態（家を出て病気を発症）を作った半分の原因は林家と己自身にある、という後悔・自責の念は自分でも驚くほど強く、自分と結婚さえしなければもっと生き永らえていたのではないかと思ったり..。

もともと感傷的な自分ですが、何もせず悲しみに埋没していたい感情は、悲嘆の自然なプロセスの一部だそうです。

●同じ頃、ある方を通じて彼女本人からというメッセージが届けられ、夜中に大泣き。

